SATO Maeko

佐藤万絵子

絵のなか／絵のそと

わたしは紙にゆびで描いています

紙は　薄く　その小数点以下数ミリメートルの厚みで　ときどき破けながら
わたしの描くものをひたすら受けとめています

わたしは絵の具にパステルを使います
パステルは紙に擦り込まれてゆきながら　静かに円筒の身を消失します

描いているときの、音
筆圧で紙が破けてしまう音
絵筆がわりのゆびのしたで、紙とパステルが擦れる音
わたしは耳を澄ますことに集中します
わたしのひく描線の、紙を傷つける音が　聴こえます

その音を聴き得たとき
わたしは、描いていたわたしのゆびが、絵のそとに在ることを　知ります

わたしは、紙に擦り付いたパステルを見ます
描線で、けば立つ紙の繊維
パステルの色に染まり、よじれまるまった紙の滓

描いていたゆびを見ます
パステルの色に染まったゆびの皮膚
指紋の溝に留まる絵の具

in the picture/out of the picture, boat 1-5（会場風景）
和紙、オイルパステル
2005年
photo by 柳場 大

そして、信じようとします
わたしが絵のなかにいたことを

わたしは絵のなかにいたことを　信じようとして、また描き続けます
けれども、どんなに描いても塗っても、
物質界にいるわたしは絵のなかにはいることはできないのです

絵に擦り込まれて　どんどん短くなってゆき、消失を果たすパステル
そのそばに
ちびりちびりとむかれたままに散り残る　パステルの包み紙に、わたしは似ている。

絵の具は物質であり、描くわたしのからだは物質であり、
わたしはこの物質の世界から　逃れられない
ならば　物質のわたしとして、絵のできるだけ近くへは行けないか？
この物質界で　最も絵の近くに在ることができる物質
それは、絵の具と　それを受けとめるもの

描くわたしも　呼ばれる名前を失い、ひとと繋がる五十音を失い、
描くための手と眼という物質としてだけ　ここに在ることができたならば　その一瞬
わたしは、パステルと紙と等しく絵のそばに、いることができるのではないか

そう、描線をひかれる紙の痛みを感じながら　絵のなかへ
そして　耳を澄ませ
絵のなかにいて　絵のそとに立てたとき、
見える景色は。